

1. 『工業報國』の碑について

株式会社池貝（旧池貝鉄工所の現在の名称）の当時の社内報によると、『工業報國』の碑は「池貝鉄工所創業」と「紀元 2600 年」を記念して、池貝戸手工場（現在市立御幸中学校校地）に昭和 15(1940)年に建てられたものだが、戦後現在の地（幸区神明町）に移設されたとのことである。池貝鉄工所は、昭和 10 年代に国内に多くの工場を設置した。川崎市内には、昭和 11(1936)年に大師中瀬に自動車工場を、昭和 12(1937)年に戸手と溝ノ口に世界屈指の工作機械工場を、また神明町に発動機部門の工場を設置し生産を開始した。また、戸手・神明・溝ノ口・三田の各工場に私立池貝青年学校を設立し、3,000 名の機械工を養成した。『工業報國』の碑は、まさに「工都川崎」の飛躍の象徴でもあった。

石碑の建造された戸手工場は、戦前三田本社工場に次ぐ工作機械製造の主力工場だったが、相次ぐ空襲爆撃のため壊滅状態となり、終戦とともにその機能を失った。しかし、石碑は、その上部に機銃掃射の跡を残すのみで無事な姿であったと伝えられる。

2. 『工業報國』の碑の保存について

平成 14(2002)年、「さいわい歴史の会」の会長を務めていた故大西啓介氏が神明工場と道路を隔てた向かいに住んでいて、この塔を含めて旧池貝鉄工所の建物の取り壊し作業が始まったのを見て、かつて日本の精密工作機械製造の最先端を歩んだ象徴といえる『工業報國』の塔のせめて銘盤だけでも保存できないだろうかとの熱い思いに駆られてかけあったところ、「工」「業」「報」「國」の彫られた 4 枚の御影石の石板（1 辺が 85cm の正方形）を壊さずに譲ってくれることになった。以後、この碑は大西家のガレージに保存されていた。

その後、機会あるたびにこの碑の存在をアピールする中、大西氏は病に倒れた。さいわい歴史の会のメンバーが大西氏の遺志の実現を期していたところ、「工都川崎」の産業遺跡について取材していた東京新聞川崎支局の記者と出会い、この件について話したところ、大変興味を示し取材してくれた。

平成 20(2008)年 8 月 13 日付東京新聞朝刊（川崎版）に「鎮魂の夏 2008・工都川崎の“証人” 軍需工場の石碑残った」の見出しで「敗戦記念日」に向けての特別記事として、この池貝鉄工所の碑石の存在が報道された（資料 1）。続いて同 8 月 30 日に上、8 月 31 日に中、9 月 1 日に下（資料 2・3・4）とこの碑について連続して関連する記事が掲載された。

この東京新聞の記事がきっかけとなり、川崎市市民ミュージアムと保存についての話が進展し、平成 21(2009)年 4 月 2 日、碑石 4 枚が市民ミュージアム南東（バス通り側）の庭園内に説明板（下の囲みご参照）付きで展示された。平成 21(2009)年 4 月 16 日付の東京新聞朝刊（資料 5）に「近代川崎物語る史料 市民ミュージアム『工業報國』の石板設置」の見出しでこの一連の保存活動が報道された。

この碑板の保存ならびに設置に取り組んだ者として、「工都川崎」の躍進と「戦争」をし
のぶ教材としてこれが活用されることを祈念する次第である。

【ミュージアム設置の銘板から】

石板「工業報國」

昭和 15 年(1940)

池貝鉄工所 (現・株式会社池貝)

寄贈者 さいわい歴史の会

この石板は、近代日本の工作機械産業に名を刻む、池貝鉄工所の工場に設置されていた石碑の一部である。

池貝鉄工所は、明治 22 年(1889)創業。国産第 1 号の旋盤や石油エンジンを開発、製造するなど、日本の工作機械を牽引してきた企業である。戦時体制下では、国家総動員試験研究令に基づき航空機エンジンなども製造、川崎市内に 3 ヶ所の工場を建設した。

そしてこの石板は、創業 50 周年と紀元 2600 年を記念し、戸手工場内に設置されたものである。その後別の工場 (幸区神明町) に移設されたが、平成 14 年(2002)工場の閉鎖に伴い石碑も取り壊される予定の中、地元の有志の人たちによって保存された。

産業都市として発展してきた川崎は、あらゆる分野で日本の「ものづくり」を牽引してきた。この石板は池貝鉄工所の存在とともに、近代川崎の歴史を物語るモニュメントとして、ここに設置した。

川崎市市民ミュージアム

(夕刊)

2008年(平成20年)8月13日(水曜日) 口版 12



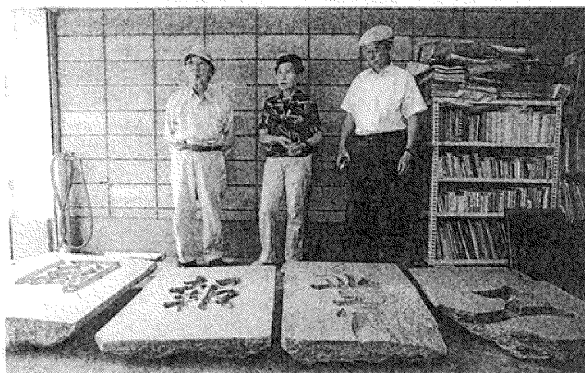
故大西啓介さん

日本の工作機械メーカーの草分け「池貝鉄工」(現・池貝、本社・茨城県行方市)が戦時中に川崎市内の軍需工場に建てた巨大石碑の一部を、3年前に亡くなった地元住民が自宅で保管、遺族が引き継いで保存していることが分かった。強まる戦時色を背景に「工業報國」と刻まれた碑は、*工都川崎、が戦争に巻き込まれていった歴史を伝える。

鎮魂の夏 2008

軍需工場の石碑残っていた

工都川崎の証人



「工業報國」と書かれた銘板の前で話をするさいわい歴史の会の野口始男・事務局長(右)ら=川崎市で

池貝鉄工は一八八九「日本の工作機械の父」(明治二十二年)に、とされる池貝庄太郎氏

(一八六九—一九三四)が東京、芝に創設。明治維新後、「機械を作る機械」(工作機械)に挑戦し、国産第一号の旋盤を完成させた。同社が川崎市内三方所に発動機などの工場を建設したのは一九三八—四〇年。国策に沿った軍需工場でもあり、四〇年の「紀元二六〇〇年」を祝い「工業報國」と刻んだ碑が、戸手工場(現在の川崎市幸区)に設置された。リストンやエンジンをおしろい、文字は創業者の筆とされている。工場は米軍の標的となり、空襲で徹底的に破壊されたが、碑は上部に機銃掃射を受けた跡が残る

「池貝鉄工」空襲で工場は破壊

程度で、無事だった。戦後、碑は同じ区内の別の工場に移設されていたが、同社は近年経営破たんし、工場は〇二年に閉鎖された。放置されていた石碑を、近くに住む郷土史家で「さいわい歴史の会」会長だった故大西啓介さんが「川崎の歴史を知る貴重な資料。このまま失われるのは忍びない」と切り取って自宅に保管。〇五年十二月に六十四歳で亡くなったからは、妻フサエさん(八八)が引き継いだ。一文字ずつほぼ正方形に切り取った四つの断片は一辺が約七十センチある巨大なもの。御影石製とみられ、重さは約百kgある。この碑には、同社は「現在の本社工場への移築も考えたが、倒産手続きの中で費用を出すところではなかった。保存されていたと

は(総務部)と驚く。同歴史の会事務局長の野口始男さん(七〇)は「川崎は「工都」として発展してきた。「報國」という負の側面も含めて、石碑は川崎の歴史をたどる遺産で、証人。大西さんの遺志を無にしないよう、保存先を探したい」と話している。

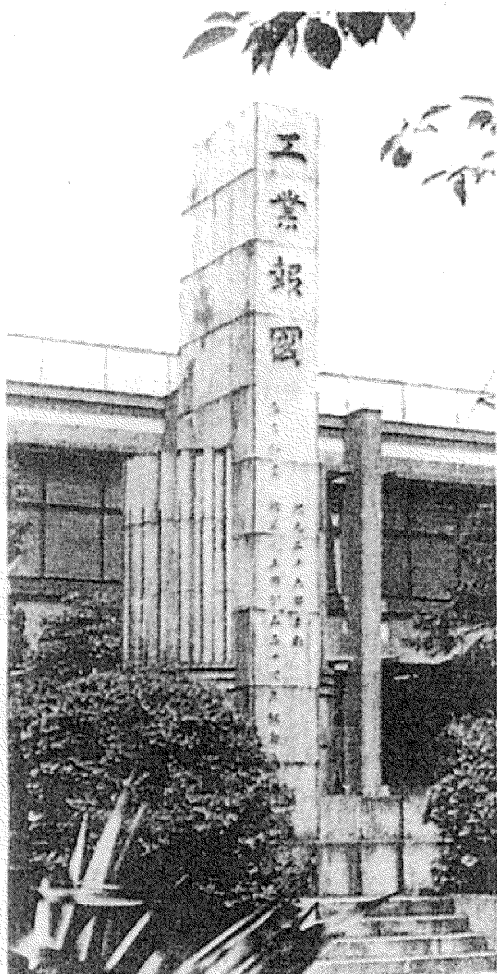
主要工作機械メーカーの歴史を調査している金沢工業大ライブラリーセンター館長の笠岡勝幸(六九)は「教授科学技術史・建築史の話「報國」は当時よく使われた「産業報國」の意味で「産業振興」によって豊かな国をつくらう」という趣旨。ことごとく国家主義的な文言でもない。日本を代表し、世界に誇る工作機械企業の一つが育った地であること、その育成を地元が応援したことへの記念の意味がある。

皇紀2600年へ「報國」誇示

川崎市幸区の民家で「工」「業」「報」「國」の四文字の石板が保存されていた。本紙十三日夕刊既報。日本の工作機械メーカーの草分け「池貝鐵工所」(現・池貝、本社・茨城県行方市)が同区内の工場に設置していた石碑の一部だ。一部は破損しているものの、字ははっきりと読み

工都の歴史を旅する
——番外編・「工業報國」を追う——

上 軍需工場「池貝」の歩み



幸区神明町の工場にあった「工業報國」の石碑＝「池貝」の社内報から

取ることができる。この碑もまた、「工都」の歩みを今に伝える、歴史の証人である。

池貝とはどんな会社なのか、戦前までの歩みを振り返ると。

一八八九(明治二十二年)、「日本の工作機械の父」とされる池貝庄太郎氏

によって東京・芝に誕生した工場は、池貝氏以下わずか四人の小さな所帯だった。当時は「池貝工場」と呼ばれた。同年末、早くも

国産第一号の旋盤を完成し、九六年には国産第二号の石油エンジンも開発。大

正期に株式会社を改組し、「池貝鐵工所」と称した。

満州事変(一九三二年)以降、戦時体制の深まりと

ともに、同社は軍から大量の工作機械の注文を受け

た。生産力をさらに拡充するため、三八(昭和十三年)以降相次いで、現在の川

崎市幸区など市内三カ所に工場を開設したのも、この流れからだった。

文部科学省の科学研究費特定領域研究「日本の技術革新」で、「企業内資料の研究」を代表者として担当

し、日本の技術革新の構造を研究し、国内の主要工作

機械メーカーにも詳しい金沢工業大ライブラリーセンター館長の笠原教授(科学

技術史、建築史)は「工作機械の国産化に早くから取り組んだのが池貝だった。

軍から大量の工作機械の注文を受け、独、米の新技術をコピーするとともに、独自技術を合体させて優れた

工作機械をつくり出した」と説明する。

「工業報國」の碑が同区戸手の工場に完成したのは三九年。笠教授は一翌年は神武暦(皇紀)二六〇〇年に

あつた。自らの技術に対する自信が確立され、また自社が国家的な評価を受けていることを記念し、国家的祝祭を機に建立された」と設置の経緯を振り返る。

川崎は四五年四月四日、米軍による本格的な空襲を受け、同十五日に最大の空襲を受けて以降、終戦まで数十回の焼夷弾・爆弾攻撃を受け、市内の主要地は焦土と化す。戸手の工場も

「八月に入ってから数回爆弾攻撃を受け、木々端みじんに粉砕されてしまった」(創立八十周年を記念して刊行したダイヤモンド社の「池貝鐵工」から)

が、碑はかろうじて残った。

軍需産業から平和産業に生まれ変わることを求められた同社は、どん底からスタートする。(加藤行平)

●続く

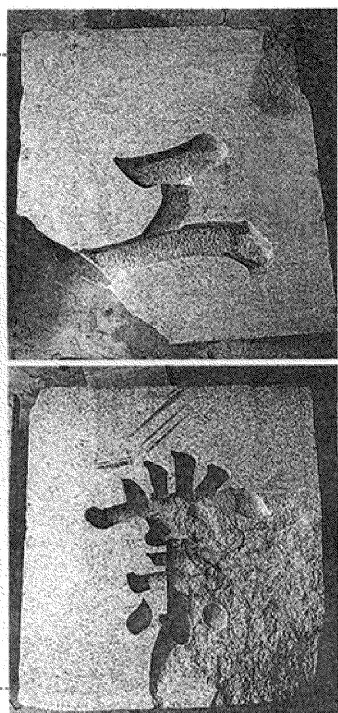
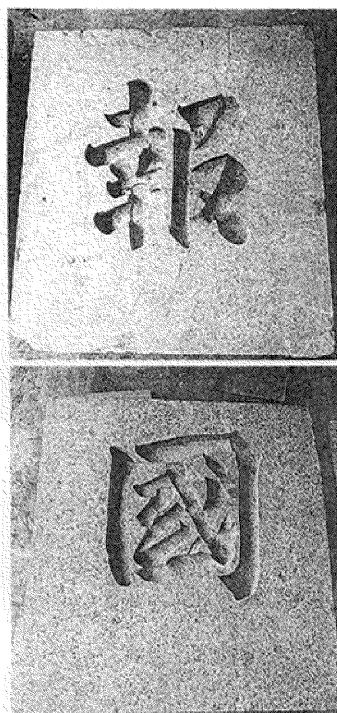
川崎

工都の歴史を旅する
——番外編・「工業報國」を追う——

戦前、日本の工作機械をリードした池貝鉄工所(現・池貝、本社・茨城県行方市)の主要工場は米軍の激しい空襲で被災し、「工業報國」の石碑があった現在の川崎市幸区戸手の工場も破壊され、終戦を迎えた。軍需工場だったことが災いし、再スタートは困難を

川崎発展見届けた「記念碑」

中 郷土史家の思い



幸区の民家が保存されていた「工業報國」の石碑

極めたが、空襲を生き延びた同区の神明工場では戦後、間もなく、船舶用ディーゼルエンジン製作、軍需から民需へ転換を図った。同社は一九四九年、新会社

「池貝鉄工」を設立、再建に向けて新たな道を歩む。朝鮮戦争による国内の特需ブームもあり、同社は急速に立ち直り、「技術の池貝」の本領を発揮していき、高度経済成長期に入る。と、さらに業績は上向いた。

しかし一九七〇年代以降、経営に陰りが見え、二〇〇一(平成十三)年二月、東京地裁に民事再生法の適用を申請、翌月から民事再生手続きを開始。川崎の工場も〇二年に閉鎖、高津区の工場もなくなり、同社は川崎での歴史に終止符を打った。

工場の跡地は現在、マンションに生まれ変わった。更地になりつつある跡地を見ながら、近くに住むさいわい歴史の会の元会長、故・大西啓介さん(〇五年十二月、六十四歳で死去)は複雑な思いだった。サラリーマン生活を定年後、地元歴史をこころ研究していた。「このままでは粉々になってしまふ。貴重な碑が失われてしまふ」

同社によると、本社工場への移築も検討されたが、再生手続きの中で移築費用を捻出するどころではなく、やむなく放棄された。現場に出かけ、関係者と掛け合い、大西さんは碑のうち字の部分のみを切り取り、自宅に持ち帰った。字の部分だけとはいえ、四角合わせれば数百kgの重さがあり、持ち帰るだけでも大変な作業だった。

「急に逝ってしまった、なぜ碑の保存にこだわったのか、聞く機会もなかった」と妻フサエさん(88)は振り返る。大西さんともに歴史の会のメンバーとして活動していた野口始男さん(80)「同会事務局長」は「工都の発展とともに、今の幸区一帯に多数の工場が進出した。大西さんはこの時代に注目し、進出した池貝にも関心が深かったのだらう」と推測する。碑はこうして残った。

(加藤行平) 続く

川崎

「負の遺産」市の足跡刻む

川崎市幸区で、郷土家の大西啓介さん(故人)が保存していた「工業報國」の碑。国内の工作機メーカーの草分け的存在で、「日本の工作機械の父」とされた池貝庄太郎氏が創業した池貝鉄工所(現・池貝、本社・茨城県行方市)が川崎に拠した工場にあった碑とともに、戦前の体制をうかがわせる「負」の側面も併せ持つ、この指摘もある。

工都の歴史を旅する
——番外編・「工業報國」を追う——

下 「報國」碑 保存求めて

碑が誕生したのは、「皇紀二六〇〇年」で国内が沸き立っていた一九四〇(昭和十五年)。「ゼロ戦」で知られる零式艦上戦闘機もこの年、制式採用となった。同社の資料を整理し、工作機械産業の歴史を研究している孟沢工業大ライブラリースクーター館長の笠野暁教授(建築史、科学技術史)は「中国における北京五輪と同様、皇紀二六〇〇年の祝祭は、国威発揚の場であったのは事実」と指摘する。

碑の保存を求めるさいわい歴史の会の事務局長、野口始男さん(左)は「報國」の文言に、やはり戦前の負のイメージを感じざるを得ない」と認める。「今後の保存先を探す際にもこのイメージが影響しないか」とも。

同社の関係者も「工業報國の碑をめぐって、社内には『再建にマイナスではないか』『いや、会社の伝統

「工業報國」の銘板の前で語る(左から)さいわい歴史の会会長の石田勝俊さん、保存していた大西啓介さんの妻、サエさん、同会事務局長の野口始男さん(幸区)



の証し」と二つの意見があった」と打ち明ける。

笠教授は「いかなる国でも国民の一体感や連帯感、国家的価値を表現する祝祭を持っているのは普通」としながら、「現在から振

り返って見た歴史的状況がどうであれ、当時のこうした祝祭に依りて自社の記念を行ったことは、素直な心構えであり非難できない」と指摘。「報國は当時よく使われた『産業報國』の意味で、『産業を興隆して国に報いる』、つまり産業振興によって豊かな国をつくる」ということであって、「このように国家主義的な文言ではなく、素直に使われたのではないか」と解説する。

先月七日、一九〇八年、川崎最初の工場として幸区堀川町に横浜精糖が進出したことを記念した「工業都市川崎発祥の地」のモニュメントが設置された。野口さんは「川崎は工都として歴史を刻んできた。保存した大西さんの思いもそうだろう。大西さんの遺志を継いで、保存先を探していきたい」と話し、笠教授は「報國の碑には、地元・川崎にとって日本を代表し世界に誇る工作機械企業の一つが育った地であること、その育成を地元が応援したこと、この記念という意味がある」と話している。

(加藤行平) おわり

<p>一九四〇(昭和十五年)、川崎市幸区にあった軍需工場内に建てられた「工業報國」の石板が十五日、中原区の市民ミュージアムそばで公開された。</p>	<h2 style="text-align: center;">近代川崎物語る史料</h2> <p style="text-align: center;">市民ミュージアム「工業報國」の石板設置</p> <p>石板は、国内の工作機械メーカーの草分けだった池貝鉄工所(現・池貝)が設置。工場が自宅に引き取り、その後遺族が保管してきた。</p>	
<p>西啓介さん(二〇〇五年に六十四歳で死去)の閉鎖後、跡地に放置されたが、「さいわい歴史の会」の初代</p>	<p>会長で、郷土史家の大西啓介さん(二〇〇五年に六十四歳で死去)の閉鎖後、跡地に放置されたが、「さいわい歴史の会」の初代</p>	<p>市民ミュージアムわきに設置された「工業報國」の石板。後方はさいわい歴史の会事務局長の野口始男さん＝中原区で</p>
<p>「近代川崎の歴史を物語るミニムメント」などとする説明板を添えて埋め込み、屋外展示された。</p>	<p>保存を訴えてきた「歴史の会」事務局長の野口始男さん(左)は「『戦争の遺物』の側面もあるが、川崎の工業力が最先端であったことも示す。保存にかけた大西さんの顔が浮かびます」と喜ぶ。志賀健二郎館長は「近代の史料は常設展示になく、戦前の川崎を代表する池貝鉄工所の活動を示す史料で、意義がある」と話している。(加藤行平)</p>	<p>石板は同ミュージアムで保存が決まり、等々力緑地にある四季園で、「近代川崎の歴史を物語るミニムメント」などとする説明板を添えて埋め込み、屋外展示された。</p>

【参考文献】

『池貝鉄工—創立80周年—』ダイヤモンド社、昭和44(1969)年

◆野口 始男

さいわい歴史の会事務局長。